

そ っ た く
啖 啄

「子育て（教育）と農業」

教育長 谷 口 淨

「子育てと農業」それって、どんな関係?と思う人もいます。また、「子育てと農業は良く似ている」とも聞きます。私も毎年夏野菜やキヌサヤ豌豆などを育てています。農業、家庭菜園といえる程でもないですが、それでも数種類の苗や種が日を追って成長していく姿を見たり、収穫するときの喜びはなんとも言えないものがあります。手間隙をかければかけたなり答えてくれる。収穫できるようになるまでには色々な行程がある。種を蒔くには時季があり作物に合った土壌作りも大切である。まず草取りから始まり、土壌改良のため石灰蒔きに耕耘、畝や堀を造り、肥料を施し苗床や種床を造り苗や種を植えて土をかぶせ水をまく、ここまででもやれやれというところですが、水やりも定期的と気象状況をみて繰り返し行う。芽が出てからも周りの草に負けないよう大きくなるように草を除去する。ようやく苗が大きくなってもまだまだ成育するための作業は続く。補助する棒を立てたり、網を張って支えたりしなければならない。やっと花が咲き実がついてきたところでも、まだまだ心配や作業がある。この頃になると病気や害虫、台風も襲ってくる、これらの対策もしていかななくてはならない。こうしてようやく成長した実を収穫することができるのです。

10月号

全国各地でも農村体験、農業体験学習が学校教育活動の中で取り上げられています。大島では昔ほど親の手伝いで農作業をすることは少なくなっています。農家、農業をする人も減少しているからです。自然に体験できる条件がない、場所がないということでしょう。農業体験から何を学ぶか。また、生きることの原点、生き物でも人間中心の歴史もあります。でも、アリもチューリップもメダカも人間も、生き物として同列で、互いにつながりをもって暮らしている。すべて38億年前に生まれた、たった1個の細胞を祖先とする仲間です。38億年、生き物は様々な物語が重なってできています。それぞれがどういう物語を紡ぐかが大事なのです。紡ぐには時間がかかります。現代社会は「早く早く」と言います。それは生き物にはできません。自動車なら早く作るための工夫ができますが、生き物は難しい。田んぼに苗を植えたらみんな秋に実る。うちのだけ一ヶ月でと言っても無理でしょう。時間をかけて育てることが大事です。トウモロコシもスーパーに置いてあれば「食べ物」。でも自分で育ててみると「生き物」だとわかります。アリやチョウが生き物ということはわかるが、トウモロコシは動かないから生き物という感覚はない。でも、目の前で育っていく姿を見れば生き物であることを実感することができます。

子育て(教育)をすることも時間や手間隙がかかります。他の動物や植物よりも大人になるまでは、人間がいちばん時間がかかるのではないのでしょうか。しかも意図して、こう育てたから「こう成った」とは限らない。子どもには子どもの、10人いれば10人の違いがある。それぞれの個性と自主性を尊重しながら親や身近な人達が、子どもの成長過程において何をどのように手を差し伸べていくか、このタイミングが難しい。また、子どもたちには自主性と個性を生かし、周りに惑わされることなく、強い意志を持ちこれからの社会に対し、雨や風にも負けない太い幹と柔軟で広い枝葉を付け、花を咲かせ、大きく実ってほしいと願う。(注:「いのちを見つめる科学教育」を参照)

「子どもたちへ」

教育長職務代理者 山田 三正

日本で起きた大震災は、神の怒りにふれた結果なのだろうか?中には天災は罪深い人間への天罰だ、と説く人がいるが、それは違う。自然はときに残酷な暴力となって、人々に降りかかる。けれどもあらゆる出来事には意味があると考えらるなら、わたしたちは自然の猛威さえからも、目をそらさず何かを学び、救いの道を探るべきではないだろうか。」これは、インド独立の父であるマハトマ・ガンディーさんが1926年の4月に演説した内容です。今から100年も前の日本で、大正12年(1923年)9月1日に関東大震災が起き、日本の政治・経済の中心、東京は壊滅状態になりました。そのことを言っているのです。救うのは今の命であり未来の命です。災害から学び、今の生活をどのように守り生かすのか探り行動する、それが未来の命につながります。ガンディーさんが語った時は東京が壊滅状態だったので、どこに生活しようと、自然はときには残酷な暴力となって人々に降りかかるのです。だからこそ、わたしたちは自然の猛威さえからも、目をそらさずに、そこから逃げることをせずに、自らの力で救いの道を探るべきだと思います。

その後の姿が今の日本です。東京です。大島の示している力だと思います。土砂災害、台風豪雨、東日本大震災等々の災害そしてコロナ禍も同じに考えられます。置かれた状況はどれも本当に大変です。大変でしたと言葉では言い表せないものでした。そして、今まさに道を探り、行動が問われています。先の見えない不安があります。大人も子どもも同じだと思います。今の子どもたちに伝えたいことがあります。今は見えない先は不安ですが、その見えない先にゴールを定めそれに向けて何を考え、何を行うか計画し、少しずつでも進んで欲しいと思います。話が少しそれます。司馬遼太郎の遺言とされる「21世紀に生きる君達へ」の中に以下のような内容があります。＝人は自然の懐で生きています。人間は、自然によって生かされてきました。昔人々は、自然を畏れ、あがめ、自分たちの上にあるものとして身をつつしんできました。が、近年人間がいちばんえらい存在だ。という、思いあがった考えが頭をもたげ21世紀という現代は、ある意味では、自然への畏れがうすい人が多くなった時代といっている。と同時に私たちは自然の一部にすぎないと素直に考えた人もまた多くいた。この自然への畏敬の念と素直な態度が君たちに育つことが希望である。＝と。自然の成り行きだから仕方がないということではありません。私たちは、小さな微生物から花、虫、動物まで自然の環境の中で生きています。そこに置かれた今、君たちは素直にそして敢然と目の前の課題に立ち向かって欲しいと思います。これからいろいろな変化が起きるでしょう。そこで今何ができるか君たち自身で考え実施して欲しいと思います。心を豊かにすること。体を鍛えること。そして学ぶこと。自分が苦しいときに人に優しくできる人はすばらしいと思います。助ける、いたわる、思いやるいろいろな状況があるけれど、人と接して初めて自分に身につきます。簡単です友達と仲良くできれば大丈夫です。仲良くするには健康であることです。健康でなければ余計に優しさを感じられます。学ぶ目的は自分を育てるためです。世の中を支える人になって欲しいと思います。世の中を支えるとは自分でしっかりと立て生きることです。そのために今君たちは学んで欲しい。体調が悪くなったり、学校がやすみになったりしても、周りのアドバイスも活用して今の自分をしっかり見て、分自のできることを一歩ずつ進めて欲しいと思います。

「いつ学ぶか」

教育委員 井島吉春

長男が今年大学に進学したがコロナ騒ぎで今年度中全てオンライン授業となり初めての大学生活を実家で過ごしている。

月曜から土曜まで毎日講義があり毎回時間内にレポートの提出が課され、案外のんびりできない日を送っているようだ。

長男が入学した大学、学部は約40年前私が在籍していたところなので、たまに授業を覗いてみるととても懐かしく、もう一度学生に戻りたい気分になった。しかも授業が面白く一年次は基礎科目なのだが忘れかけていた用語や知識などを再確認したり、歴史的観点や新説など最新の研究報告を聞いたりして、息子よりも講義を楽しんでいる。

授業の進め方はプリントと映像を見ながらとても丁寧な解説で自分の時と比べるとこんなに興味のわく授業だったかなあと遠い昔のことを思い浮かべる。

私も年齢を重ねながらそれなりに人生経験を曲がりなりに積み重ねてきたので、この大学の講義が面白く感じるのだろうが本来「学ぶ」という事は楽しい事なのだろう。それぞれの年齢によって同じ事柄でも受け止め方が違うだろうし、何かのきっかけで学ぶ楽しさを知ることができれば幸せである。そう考えると今の社会構造は、小、中、高、大と、ほぼストレートに段階を経て失敗なく社会人となるのが普通で、それをよしとしている。この流れに乗らなければ大手一流企業と言われているところへの就職は難しい。あっても稀である。

どこか途中でこの流れから離脱、脱落したとしても学びたいところからまたやり直しても良いのではないかと思う。社会人になってから大学に戻って学び直し再び就職したり、あるいは高校の授業を受け直したり、学びたい時にもう一度学ぶ機会があって再就職がすぐ出来る仕組みなどあればいいと思う。何しろ学びたいと思った時が一番いろんなことを吸収することができる器が備わっている時なのだ。

問題はいろいろとあろうが雇う企業側の考え方が変わってくれて社会全体で人間を育てるという思想になれば実現できるのではないかと思うがどうだろう。新卒一括採用の良さとはいったいなんなのだろう。

「コロナ感染症」

教育委員 山本忠夫

今年1月、コロナウイルス感染症の話題が、ニュースになりました。その頃は、まだ、対岸の火事。まさか世界上に飛び火するとは思いませんでした。それから8カ月。色々なことがありましたが、何とかここまで来ました。そして思ったこと。今までいつものようにあった日常がなくなるって、こういうことだったんだ…、と。「今、元気でいられることに感謝しなきゃいけないね。当たり前と思っちゃいけないね」という言葉を何度も聞いてきましたが、こんなことを経験するとやはり実感します。春はこんな行事があつて、夏はこんな計画をして…と思っていたことが、できなくなるなんて、想像したこともなかった。誰もが初めてのこと。「人とふれあいを大切に」という言葉が、今は「人と接することを極力避ける」という現実になってしまった。コロナ感染の溢れる情報に一喜一憂したり、どれが正しくてどれが間違っているか…分からなくなったり、疑心暗鬼になったり。でもそんな中でも、感染予防を徹底しながら、with コロナで少しずつ元の日常生活に近づく希望を感じられる日々があります。まだまだ不安感がありますが、やはり人は繋がりながら安心できる社会を築き上げるために協力し合うのですね。今回のコロナ感染は良い出来事ではありませんが、ここでまた人々が力を合わせ、幸せへ繋がる知恵が、幸せな社会が作られていく。そして「今、元気でいられることに感謝する」という生き方を大切にしていきたいなあ、と思います。

「ザ・サイエンス」

教育委員 宮本里香

中学校に入学すると、ひときわ、毎日ニコニコして学校に来る先生がいました。「おはようございます」というと「今日も元気でいいですねえ」と返してくれます。先生は職員室で白衣を着て、理科室へと向かっていきます。「今年は課内クラブに何人か希望者がいたら、理科クラブができるらしいよ！」と友達から聞きましたが、超小規模校でしたので、集まるのかわかりませんでした。部活希望届けの結果、3年生1名、1年生5名の計6名が集まり理科クラブができました。なんとも、女子は私1名でした。「先生、女子は私だけです」というと、「大丈夫、いいですねえ」とニコニコしています。その不安はすぐに消えました。何か調べようと言う事で、伊豆諸島全域に分布する小さい巻貝「アラレタマキビとイボタマキビの研究」をすることになりました。まず、皆で海に行き、「あれ?アラレタマキビは波打ち際にいるけど、イボタマキビは離れたところにいる」でも、誰も動いた姿を見たことはありません。次々と疑問が出てきました。二種類の貝を学校に持ち帰り、海水をかけたり、淡水をかけたりして貝の反応を見ます。海水をかけると角をだし、歩く姿や食べる所も見ることができました。乾燥した空気中で何も食べないのに、9ヶ月も生き続けたのには本当に驚きました。疑問に思ったら、仮説をたてて、先生も生徒も一緒になって、調べました。その研究が東京都科学教育振興会、読売新聞社主催の日本学生化学賞・東京都の部で「最優秀賞」をとることができました。大きく新聞報道され、たくさんの方が喜んでくれました。表彰式には皆で出席でき、貴重な経験をさせていただきました。その後も、2年生では「優秀賞」3年生で再び「最優秀賞」を取ることができ、大きな自信になりました。そんな指導をしてくださった杉山武久先生は今年、旅立たれました。ご家族の方から、先生が出版された本をいただきました。その中に、このようなことが書かれています。「先生何も知らないんだね！」ある日の遠足のときだった。生徒が野に咲く花を持ってきて「先生、この植物の名前はなんですか。」「いやーわからないな。大事に学校に持って行って図書室で調べてみたら」また別の日の海岸でのこと。「先生、この貝なんという名前なの?」「いやーわからないな」「先生は理科の先生なのに全然知らないんだね！」その後、先生は赴任した夏休みにカメラを持って野山や海岸を駆け巡り猛勉強を始める生活を数年続けられたと知りました。そういえば、地域の人から今日は草むらから理科の先生がでてきて驚いたよど何回か聞いたことがあります。先生はその成果を、自然を語る理科日より「ザ・サイエンス」にまとめて、生徒や保護者に配布してくださり、家でも、貝や草花の話を親子で話す機会が増えました。今まで、草や木があつても、海で貝を見ても、あたりまえすぎて、見過ごしてきたものが草花の名前や貝の名前を覚えるだけで、色々知りたくなるのだから不思議です。理科室には貝の標本がズラリと並べてあり、どれだけ名前を覚えたのかテストをします。休み時間でもどれだけ覚えたかテストができます。もちろん四季折々の草花もです。真剣な顔でテストに参加しているのは生徒だけではなく、他の教科の先生もいました。親から聞いた話や自分が見て感じて書いた生徒の記録を「海辺の科学」「伊豆諸島の植物誌」に本として残して下さっています。中学校理科の教科書(東京書籍)にも生徒にわかりやすく関わり、ご尽力されたと聞きました。先生に出会え、自然を探求する心、楽しさややすばらしさに気付かせてくれる指導をしていただけたことに感謝し、杉山武久先生に敬意を表したいと思います。

「伊豆大島文学・紀行集 全四巻」発刊の意義

古くから観光地として知られていた伊豆大島。昭和になってその知名度は全国レベルになっていく。昭和の初期、船で一晩揺られて早朝に島に着けば、其処には椿の花と素朴で働き者の島娘、そして都会では味わうことの出来ない三原山の雄大な景色。この桃源郷のような島へ詩人、小説家、作家、画家などが挙って訪れた。そしてこの「文人墨客」と称される人々は、島のすばらしさに感動し、詩や歌、紀行文、絵画などを多数書き残してくれたのである。これらの大島の財産とも呼ぶべき貴重な作品を後世に残しておくべきと、長い時をかけて収集してくれたのは岡田在住の時得孝良氏と元町在住の藤井虎雄氏である。これらの作品群を後世に伝える文化遺産として製本化すべく、町教委との共同的な動きが固まり、準備期間も含めて6年をかけ「第1巻・詩歌編」、「第2巻・小説編」、「第3巻・紀行記編」、「第4巻・絵画編」を無事完結するに至った。恐らく最初で最後といっても過言ではないこの「文学・紀行集」。是非、手にとって御一読されることをお勧めしたい。

最後に、大変ご多用の中を「第1巻・詩歌編」から「第4巻・絵画編」の編集並びに執筆等にご尽力をいただきました、時得孝良氏、藤井虎雄氏に対して心よりお礼を申し上げます。

教育委員会カレンダー一年間予定表

月	日	内 容	場 所
10	11	大島町体育祭レクリエーション大会 予備日 10月18日(日)	つばき小学校グラウンド
11	1	大島町体育祭 駅伝競走大会	大島全域
12	8	大島町立小中学校連合音楽会(中止)	開発総合センター2階大集会室
1	9	成人式	開発総合センター2階大集会室
	15	大島町立小中学校連合作品展 (19日まで予定)	開発総合センター2階大集会室
2	6	大島町体育祭 野球大会(小学生の部)	差木地地域センターグラウンド
	中旬	大島町文化祭 芸能大会(予定)	開発総合センター2階大集会室
3	上旬	大島町文化祭 作品展(予定)	開発総合センター

※啐啄(そったく)とは

鳥の卵が孵化しようとするとき、殻の中で雛鳥が外に出ようとして内からコツコツ殻をたたく音を「啐」といい、母鳥がその孵化の瞬間を悟り、殻の外をコツコツつき破ることを「啄」といいます。この啐と啄の呼吸が合うとうまく殻が割れ丈夫な雛が誕生しますが、どちらか早すぎても遅すぎても良い雛は生まれません。教育も教わる側の生徒と教える側の先生が、啐・啄同時である事が理想であり、依って大島町教育委員会便りを『啐啄』と名づけました。